

(対象事業：地域連携強化事業・地域文化資源活用事業・ミュージアム支援地域人材育成事業
・国際交流拠点形成事業)

事業名：“青梅ミュージアムロード”整備推進事業（「青梅で日本に会おう」運動）

事業者名：青梅ミュージアム協議会
(中核館：吉川英治記念館)

住所：東京都青梅市柚木町1-101-1

TEL：0428-76-1575

FAX：0428-76-1936

HPアドレス：<http://www.kodansha.co.jp/yoshikawa/>

連携事業者名：玉堂美術館・御岳美術館・櫛かんざし美術館・青梅きもの博物館（以上青梅ミュージアム協議会加盟館）

会場：青梅市内御岳～梅郷地区

事業期間：平成22年6月1日～平成23年3月15日



吉川英治記念館

1. 館の使命と本事業の関係

青梅ミュージアム協議会は青梅市内の多摩川上流域に点在する玉堂美術館、吉川英治記念館、青梅きもの博物館、たましん御岳美術館、櫛かんざし美術館（設立順）の5館により、相互交流と地域に即した活動展開を目指して、平成12年に設立された。

これらの5館は、それぞれジャンルも特徴も異なる博物館施設であるが、青梅市のみならず日本を代表する文人であり、ともに文化勲章受章者でもある川合玉堂と吉川英治を核に、日本の美術（玉堂美術館・御岳美術館）、文学（吉川英治記念館）、伝統工芸（櫛かんざし美術館・青梅きもの博物館）という《日本の美と心》を凝縮したミュージアムであるという共通点がある。

本事業は加盟5館が、ジャンルを超えて連携し、それぞれの有する文化的遺産に青梅の豊かな自然の景観美を加えた《美しき日本》を広く世に伝えることを目指すものである。

2. 企画内容

①事業目的

青梅市内の多摩川上流域にある《日本の美と心》を凝縮した多様な博物館施設と、周囲に残る豊かな自然の景観美や歴史的風土を体感することによって、《美しき日本》を再認識してもらうとともに、それを次世代へと受け継ぐことを目指す。

②事業概要

①の目的の達成のため、青梅市内の多摩川上流域を“青梅ミュージアムロード”と名付け、多様な文化的遺産と自然美が存在することを広く伝えるべく、その手段として協議会加盟の5館を巡り歩く“スタンプハイク”を実施する（実施日：2010年10月2・3日／2011年2月26・27日の計4日）。

また、次世代に《美しき日本》を受け継ぐため、青梅市内の学校施設に児童・生徒を対象にした無料パンフレット＝“青梅ミュージアムロード”子供パスポートを配布する。

3. 事業実績

(1) 事業の主な内容及び日程

(A) “青梅ミュージアムロード” めぐりスタンプハイク

○開催日：第1回：2010年10月2日（土）・3日（日）／第2回：2011年2月26日（土）・27日（日）

○概要

10月実施分は、JR御岳駅前で受付けて、御岳美術館→玉堂美術館→櫛かんざし美術館→吉川英治記念館→青梅きもの博物館を巡り歩く。2月実施分は、JR日向和田駅近くで受付けて、青梅きもの博物館→吉川英治記念館→櫛かんざし美術館→玉堂美術館→御岳美術館を巡り歩く。

受付で大人1500円、小人1000円を参加費として徴収し、参加者には各館の資料とスタンプハイク用ガイドマップと共に、入館証としてウォーキングタオルを配布する。なお、このタオルは青梅の町がかつて繊維産業によって栄えたという歴史を知ってもらう教材とするため青梅に起源を持つ繊維メーカーに発注する。5館でタオルを提示すれば、入館はフリーパスとする。

1日で回ることを前提にして、午前9時30分から11時まで受付。ただし、10月・2月とも、フリーパスの有効期限は実施する2日間とする（1日で回りきれない場合に宿泊による周辺への観光振興を期待しての措置である）。

参加申し込みは、事前にハガキかファックスで行い、参加者は当日、参加費と交換で資料類を受け取る。申し込み窓口は吉川英治記念館。なお、5館の窓口での申し込みも受け付ける。

参加者見込みは1日60人とする。申し込みがこれを超えた場合は、当日の不参加を見越して100人までは受け付ける。

告知は各所へのポスター送付、マスメディア各社へのリリースを配布、ホームページ作成、および、新聞と雑誌に対し有料広告を出稿する。

(B) “青梅ミュージアムロード” 子供パスポートの配布

○配布時期と有効期限：1学期終了前（7月8～10日）／有効期間2011年3月15日まで。

○要領

青梅市内の小中高校、および、杉並区内の公立中学校に子供用ガイドマップ＝“青梅ミュージアムロード”子供パスポートを配布する。杉並区内を対象とするのは平成21年に青梅市と杉並区が締結した交流協定に配慮したものである。

“青梅ミュージアムロード”子供パスポートを持参した児童・生徒は、それを提示すれば5館を無料で見学できる。また、児童・生徒を引率して来館した保護者は、子供パスポート1部につき1人まで入館無料とする。

“青梅ミュージアムロード”子供パスポートにはスタンプハイクの押印欄を設け、子供たちにスタンプハイクを行わせる（遊戯性を持たせることにより関心を促す）。

(2) 参加者の数

(A) “青梅ミュージアムロード” めぐりスタンプハイク

参加者人数 延べ136人

内 訳：大人135人 小人1人

(B) “青梅ミュージアムロード” 子供パスポート

参加者人数 延べ207人

(3) 事業により作成した印刷物等

(A) “青梅ミュージアムロード” めぐりスタンプハイク

スタンプハイク用ガイドマップ (400 部) / 入館証タオル (400 部) / スタンプハイク用各館スタンプ (15 個) / 広報用ポスター (100 枚) / 広報用チラシ (枚)

(B) “青梅ミュージアムロード” 子供パスポート

“青梅ミュージアムロード” 学習パスポート (1 万 7000 部)

(4) 実施事業に関する新聞記事等

○新聞記事

紙名	掲載日	備考
朝日新聞	2010 年 9 月 5 日	広告
読売新聞	2010 年 9 月 5 日	広告
西多摩新聞	2010 年 9 月 10 日	情報掲載
Weekly News 西の風	2010 年 9 月 10 日	告知記事
広報おうめ	2010 年 9 月 15 日	情報掲載
よみうりかわら版	2011 年 1 月 9 日	情報掲載
asacoco	2011 年 1 月 13 日	情報掲載
西多摩新聞	2011 年 1 月 21 日	告知記事
リビング多摩・むさしの	2011 年 1 月 22 日	広告
毎日新聞	2011 年 2 月 4・5 日	広告
西多摩新聞	2011 年 3 月 4 日	取材記事

○テレビ、関連誌等

媒体名	掲載号	備考
『多摩ら・び』	2010 年 8 月号	情報掲載
『旅サライ』	『サライ』2010 年 11 月号増刊	広告
『週刊新潮』	2010 年 10 月 7 日号	告知記事
『多摩ら・び』	2010 年 12 月号	特集記事
『週刊新潮』	2011 年 2 月 3 日号	告知記事
多摩ケーブルネットワーク	2011 年 3 月 2 日 17:30～	ニュース



『多摩ら・び』2010 年 12 月号表紙と当該記事

4. 事業の成果及び今後の課題（参加者の意見を含む。）

この文化庁による活動基盤整備支援事業には、今回と同様の内容で平成21年度も応募し採択されたが、望んだような効果が得られなかった。その原因を昨年は、スタンプハイクについては（a）実施日が観光のオフシーズン、（b）広告・宣伝が不十分、学習パンフレットについては（c）学校の夏休み前に配布できなかったこと、と分析した。その反省に立ち、（a）については第2回のスタンプハイクの実施時期を梅郷地区で観光シーズンが始まる2月下旬に設定し、（b）については、新聞雑誌の不確実な記事掲載に期待せず、直接広告として出稿することにした。

しかし、スタンプハイクは、昨年の参加者が182名に対して、今回は136名と36%の減少となった。同じ企画で二度目の開催なので関心が下がりがちであるという点を考えても、少々残念な結果となった。

そんな中ではあるが、当初の予定にはなかったものの、その後の経過の中で多摩・武蔵野検定とのコラボレーションということが行なわれた。

多摩・武蔵野検定（主催：社団法人 学術・文化・産業ネットワーク多摩）はいわゆる地域検定の一つであるが、この検定の合格者に、同事務局を通じてボランティアガイドを依頼し、実際に参加者を引率してスタンプハイクのコースを歩いてもらった。

このことは、参加者にとってコースや時間配分がつかみやすく、効率よく5館を回ることができるというメリットがあっただけでなく、ガイドを引き受けた多摩・武蔵野検定合格者自身にとっても、改めて青梅と5館の魅力を知る機会ともなった。

ガイドを行なった検定合格者からは「道を間違えて引き返したり、ハプニングはありましたが、戦時中、山に墜落したB29のパイロットを地元の人が手厚く葬った話や餘部（あまるべ）鉄橋と同じ工法で建設された軍畑の鉄橋の話などをして参加者に喜んでいただき、嬉しかったです。ぜひ、またガイドをやってみたい。」

「参加者の方から『自分たちだけでは日向和田から御嶽までとても歩けない。ガイドさんのおかげで草思堂通りや御岳遊歩道など素敵な道が歩いてよかった』と言ってくれてとても嬉しかったです。」

「鎌倉の梅やオウメソウ、御岳の溪谷美など青梅の魅力をいっぱい紹介でき、参加者にも喜んでもらえて嬉しかった。」

「以前青梅に住んでいて、青梅には愛着があったが、より一層好きになった。ガイドは初体験で緊張したが、事前のレクチャーで勉強したことを披露できてよかった。」との感想をいただいている。

青梅ミュージアム協議会の加盟館では、従来ボランティアを募集することには躊躇があったのだが（無報酬への遠慮や人員を集めるシステムの不備）、今回のことをきっかけに、身につけた知識を活用したいと考えている地域検定合格者とイベントに人員が割けない小規模のミュージアムの間で利害が一致することがあることを学んだ。

一方、（c）については、前年の編集データを基礎にすることで、一からパンフレットを作るよりも大幅に作業時間を短縮することができ、夏休み前の配布に成功した。と同時に、趣旨を理解していただけるよう、青梅市教育委員会の校長会に出席して内容説明も行なった。

その結果、夏休み前に配布できたので、比率として夏休みの利用が予想通り多かった。

昨年ののべ利用者は243名に対し、今年は207名で、こちらも数を減らしているように見えるが、昨年は校外学習に利用した学校があったため（各館の内訳中の40名ほどがこれに該当）、その分だけ個人としての利用者が少なかった。その点、今年は全て個人の利用者であったので、個人の利用者に限定すれば、数は増えていることになり、我々の意図に即した利用法であったと言える。